

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

インセンティブ (incentive) とは、「動機づけ」とか「誘因」と訳されることが多い。「ジョウレイ策」と訳されることもある。インセンティブとは、ある主体から特定の行動を引き出すためのエサ（あるいは罰則）や、そのエサが与えられる仕組みを指す。個人がある行動をとるためには何らかの理由があるわけだが、その理由にあたるものと考えてよい。

社会経済現象を理解するためには、各個人が直面するインセンティブの構造を考えなければ、その本質的な理解は得られないといっても過言ではない。このように書くときたいそう大げさに聞こえるのだが、実はインセンティブの構造を考えるということは、われわれが日常的に経験かつ実行しているものだ。むしろ、たいいていの人はその構造を明らかにすることを楽しみにしているといってもよい。

推理小説では、犯罪の捜査はまず犯人の動機を明らかにすることからはじめるのが「ジョウセキ」になっている。誰か人が殺されたとすれば、殺される理由があるはずで、その理由から割り出して怪しい人を探すわけだ。「インセンティブ」という言葉を使って言い換えれば、犯人には殺人をするインセンティブがあったはずだから、そのようなインセンティブのある人は誰だったのかをめぐって捜査がすすむということになる。サスペンス・ドラマでも、事件に関係している人々の間に微妙な利害関係があつて、犯罪の動機が明らかになったとき、なるほどと思えるようなものが面白い。言い換えれば、インセンティブの構造が込み入っているものほど面白いし、ありきたりの動機ではがっかりさせられてしまう。「刑事コロンボ」シリーズは、このあたりをB巧妙に利用している。ドラマの開始5分で犯人自体はわかってしまうのであるが、刑事コロンボが犯人が直面していた微妙なインセンティブの構造を、しだいに明らかにしていくところが、このドラマのまさに魅力になっている。

経済問題で重要になるインセンティブには、大きく分けて価格・金銭によるインセンティブ、法律や制度によるインセンティブ、あるいは習慣や宗教によるインセンティブに分類できる。

価格・金銭・物によるインセンティブは、その働きが一番はっきりしている。われわれの行動は金や物にすぐに影響されるからだ。買おうかどうか迷っていた洋服が、ある日みるとバーゲンで安くなっているから、思わず買ってしまった。平たく言えば安くなったから買った、というわけだが、これは、価格のインセンティブが働いた、あるいは、価格が下がったことにより、買うインセンティブが増した、などと表現するとよい。価格が上がれば、それだけ買うインセンティブは減少する。単純^㉑めいカイである。

新築マンションを見学に行くと、お土産をくれたりする。たいした商品ではないが、ない場合に比べればちよつと見に行こうかという気持ちは増えるであろう。お土産が見学に行くためのインセンティブになっているのである。大学で学生の出席率が悪いのが問題であれば、出席した学生にお土産をあげれば、ちよつと見に行こうかという学生が増えるであろう。いっそのこと、授業料を多めに取って、出席するたびに学生に現金で1000円ずつ返金するようにすれば効果テキメンであることは間違いない。女性を誘った男性が㉒ことにも、似たような効果が期待できるようだ。

法律や制度によるインセンティブは、法律によってある行動をさせようとするものである。これは一見楽に実施できそうだが、そうではない。効果的な罰則がないと、インセンティブとして機能しないからであり、罰則を運用するコストを考えれば、C法律によるインセンティブがすぐれているとはいえないからである。殺人くらいになるとモラルの問題も考慮すべきであろうが、それにしても、もし仮に法律は殺人はしてはならないと規定しているだけで、殺人に対する罰則規定が何もなければ、はたして社会が成り立つものであるか。私には自信がない。

たいいていの人にとって、違法駐車をしないのは、交通モラルがすぐれているためでも道路交通法のD趣旨を理解しているからでもなく、単に駐車違反をとられた場合の金銭的出費が違法駐車を思いとどまらせるインセンティブになっているにすぎない。違法駐車に対する罰則規定がなかったとすると、交通の混乱はE必至である。駐車禁止の取りEシまりがまれになればなるほど、より多くの違法駐車が見られるのはこの事実を裏づけるものである。

この場合の法律の役割は、違反者に金銭的なインセンティブ（罰金）を与えることによって、人々の行動をコントロールしようとするものである。刑事事件の場合は、インセンティブはFちようエキの形で与えられることもある。いずれにせよ、法律とはインセンティブの構造を明文化したものにすぎない。したがって、そもそも法律は必要とする金銭的インセンティブの関係を考慮して作らなければならないものなのだ。世の中には金を与えて解決することを嫌うG風潮があるが、法律によるインセンティブ自体、金で解決する部分があれば機能しないことを忘れてはならない。

習慣やH宗教によるインセンティブは、いったん動きはじめるとコストもかからずIジョウほうであるが、かならずしも合理的には機能しないのが問題である。たいいていの宗教は殺人を禁じていて、殺人をしたものは神様が罰してくれることになっている。信者が神の罰を恐れるため、あるいは神の意思を尊重するために、宗教が殺人を犯さないためのインセンティブとして機能している。神様が与える罰則を機能させるためには牢獄さえ必要でないため、われわれ人間が費やさなければならぬ費用はそれほど大きくない。したがって、この場合には宗教によるインセンティブは非常に効率的だといえる。残念ながら、罰則は宗教の違う人々を殺害した場合にはかならずしも当てはまらないらしいので、宗教の力を過信するのは危険である。

（梶井厚志「戦略的思考の技術」による）

問一 太線部⑦～⑩のカタカナで表記された部分に使用する漢字を、次の各群の1～5のうちから、それぞれ一つずつ選びなさい。

- | | | | | | | | | | | | |
|---|-------|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| ⑦ | ショウレイ | 1 | 奨 | 2 | 賞 | 3 | 省 | 4 | 称 | 5 | 将 |
| ⑧ | ジョウセキ | 1 | 城 | 2 | 定 | 3 | 上 | 4 | 乗 | 5 | 常 |

- ㉞ めいカイ 1 界 2 解 3 快 4 戒 5 海
- ㉟ シマリ 1 締 2 閉 3 絞 4 占 5 刺
- ㊱ ちようエキ 1 益 2 液 3 易 4 疫 5 役
- ㊲ チョウほう 1 重 2 徴 3 超 4 長 5 眺

問二 二重線部①～③の本文中における意味として最も適当なものを、次の各群の1～5のうちから、それぞれ一つずつ選びなさい。

- ① 趣旨 1 主要内容 2 作った人の考え 3 対象となる事柄 4 法律の条文 5 主なねらい
- ② 必至である 1 緩和される可能性がある 2 まちがいなく生じる 3 遠くない将来に起きる
 - 4 たいへんなものになる
 - 5 死にもの狂いで対処する
- ③ 風潮 1 皆が正しいと認めている考え 2 道徳的だと思われる思想 3 風によって発生する潮の流れ
 - 4 世間の常識となっている固定観念
 - 5 時代とともに変わる世の中の傾向

問三 傍線部A「インセンティブ (incentive)」とは、『動機づけ』とか『誘因』と訳されることが多い」とあるが、何らかのインセンティブが作用した結果と見なし難いものはどれか、次の1～5のうちから一つ選びなさい。

- 1 寒い部屋でうたた寝をしていたら風邪をひいた。 2 会議で心中では反対意見を抱いていたが黙っていた。
- 3 翌日が学校の試験なので夜遅くまで勉強をした。 4 近所ののら猫がひもじいのでエサをあげた。
- 5 バイクに乗るときには必ずヘルメットをかぶる。

問四 傍線部B「巧妙に利用している」とあるが、それはどういうことか、その説明として最も適当なものを、次の1～5のうちから一つ選びなさい。

- 1 視聴者は最初に犯人のインセンティブがわかるので、犯人の立場や気持ちの動きに感情移入しやすい。
- 2 視聴者は最初に犯人がわかるので、犯人がどのような意図で犯行に及んだかということに興味が集まりやすい。
- 3 視聴者には最初に犯人がわかるので、製作者は退屈にならないようにストーリーに趣向を凝らすことになる。
- 4 視聴者は最初に犯人がわかるので、誰が犯人かと頭を使って考えなくても気楽にドラマを楽しむことができる。
- 5 視聴者は最初に犯人がわかるので、自動的に犯人のインセンティブもわかることになり、テンポよくストーリーを楽しめる。

問五 空欄⑧に入れるのに最も適当なものを、次の1～5のうちから一つ選びなさい。

- 1 やさしくする 2 食事代をもつ 3 身なりを整える 4 自動車で迎えに来る 5 甘いことばをささやく

問六 傍線部C「法律によるインセンティブ」とあるが、筆者はそれについてどのように評価しているか、最も適当なものを次の1～5のうちから一つ選びなさい。

- 1 法律として政府が禁止事項を決めれば、ほとんどの人々はそれに従うので有効である。
- 2 法律を破ったときの罰則がしっかりとしていないと有効でないから意味がない。
- 3 法律は他のインセンティブとの組み合わせがなければ十分に有効にはならない。
- 4 法律よりも金銭によるインセンティブのほうが有効なので補助的にしか意味がない。
- 5 法律は人々の道徳心が高いときには有効であるが、現在はそのような状況ではない。

問七 傍線部D「宗教によるインセンティブ」とあるが、筆者はそれについてどのように評価しているか、最も適当なものを次の1～5のうちから一つ選びなさい。

- 1 コストがかからないインセンティブは、その分有効でなくなるのも早いので万能ではない。
- 2 世の中にはどの宗教にも属していない人がいるから、全員には有効にならないという意味で限界がある。
- 3 同じ宗教の信者同士でしか通用しない上に、合理的でない部分が存在するので有効性には限度がある。
- 4 宗教による教えをやぶっても、実際には神様からの罰は下されないので、それを知った人には有効でなくなる。
- 5 宗教の違う人々にはあてはまらないので、他のインセンティブよりもかえって危険である。

問八 本文の内容に最もよく合致するものを、次の1～5のうちから一つ選びなさい。

- 1 インセンティブには各種のものがあがるが、宗教的インセンティブがコストの面では最もすぐれている。
- 2 インセンティブが人々の行動を決めているのだから、各種のインセンティブの構造を理解するのが重要である。
- 3 インセンティブのことがわかっていないと、「刑事コロソボ」のような推理ドラマを十分に楽しむことはできない。
- 4 価格・金銭のインセンティブにつられて人々が行動を決めるのは、ばかげたことであるからやめたほうがよい。
- 5 インセンティブの面から考えても、世の中では法律や宗教よりも金銭の力のほうが強いことがわかる。

【解答】	
問一	㉞ 1
問二	② 1 2
問三	③ 5 3
問四	⑤ 1
問五	④ 5
問六	⑦ 1
問七	⑧ 5
問八	⑨ 1

【解説】

問三 1の「風邪をひいた」という結果はうたた寝をするという行動を引き出す「エサ」または「罰則」にあたらぬ。4が紛らわしいが、結果として猫がなつくことへの期待や、エサをあげるという行為自体への楽しみが「インセンティブ」として考えられる。

問四 傍線部Bの直前の「このあたり」は、前の「サスペンス・ドラマでも…がっかりさせられてしまう」の二文の内容を指す。その内容を踏まえ、直後の一文から、「インセンティブの構造」を明らかにしていく過程に重点が置かれている点が「巧妙」であることをとらえる。

問六 「法律によってある行動をさせようとする」場合、「効果的な罰則がないと、インセンティブとして機能しない」とある。2は「意味がない」が言いすぎ。

問七 「宗教によるインセンティブ」は、「かならずしも合理的には機能しないのが問題」であり、さらに「宗教の違う人々を殺害した場合」などは罰則もあてはまらないという問題もあるため、「過信するのは危険」だと述べられている。無宗教の人については言及していないので2は不適。「他のインセンティブ」と比べて「危険」と述べているわけではないため、5も不適。

問八 2段落の一文目に着目する。1については、「法律や制度によるインセンティブ」にはコストがかかり、「宗教的インセンティブ」はコストがかからないことは本文で述べられているが、すべてのインセンティブを比較して「宗教的インセンティブ」が「最もすぐれている」とは述べられていないので不適。

次の文章を読んで、後の問に答えよ。

「やばい」という言葉がある。その語源には諸説あるようだが、いずれにしろこれは下品な隠語と呼ぶべきものであった。『大辞林第三版』によれば、「やばい」とは「やば」という言葉が形容詞化したもので、もとは、盗人・香具師（かぐし）が使用した隠語だとのことである。「やば」とは危険なさまや不都合な様子を指す形容動詞で、『膝栗毛』には「おどれら、やばなことはたらきくさるな」という用例があるようだ。現代語に訳せば、「おまえら、それはやばいよ」となるか。盗人たちの隠語だったとすれば、それをまっとうな人間が使うべきではない、下品な言葉とみなすにも理由があったといえよう。

盗人言葉であるとすれば、「やばい」とされる対象は、あまり合法的とはいえない活動を指したに違いない。たとえば、人目を避けていかがわしい場所に忍び入り、少々やんちゃな悪さをしようとしたところを誰かに見つかりそうになったとする。そんなときに、「これはやばい」と表現するのは、語源からして正当な用法といってよからう。

いくら全国に「ブキウウ」辞書にも採用された言葉とはいえ、それによって語感が上品になったという感じはしない。現在でも、良識ある大人が公に使うべき表現ではなからうと私は心得る。

ところが、若者の間では「やばい」の意味が、最近変化をもトげつつあるらしい。レストランや居酒屋で情報収集のために神経を研ぎ澄ましている、「これ、やばいです」というような表現を耳にする。しかも妙齢の女性が下品であるはずのこの言葉を公の場で平然と使うものだから、私などは少なからず驚いてしまう。

いったいこれはどういうことなのか。再び『大辞林第三版』によれば、「やばい」には自身の心情が強く揺さぶられるほどすごい、という意味が発生しているとのことである。しかも、これは肯定の意味にも否定の意味にも使われるそうである。

つまり、レストランで女の子が「これはやばい」と叫んでいたら、それが X という意味であることも想定しておかなければならないということだ。私が気に入っている路地裏のあやしげな飲み屋に行つて、そういうところはたいいて見るからにやばい店構えをしているわけだが、「この店はやばいですね」と連れが言つたとすると、これをどのように解釈すべきなのかとてもややこしい。

新しい「やばい」の使い方が登場したことによつて、実際にこのように 入り組んだ状態に 入る危険性はないのだろうか。そこで「やばい」の正確な用法を学ぶためにインターネット検索を試みると、「とてもすごい」といった意味の形容詞として、すでに広く使われていることがわかる。いくら調べても私自身の違和感はまったく 払拭されないのだが、他方で使い手の間であらさまな不都合が生じているようにも見えない。

私の理解では、「あの技はとてもすごい」という代わりに、「あの技はやばい」と表現できる。また、「この絵はすごく良い」と書く代わりに、「この絵はやばい」と書いても良い。「すごく寒い」の代わりに「やばい寒い」という表現も見つけた。もともと、意味はともあれ発音することを考えれば、せめて「やばく寒い」と書いてほしいものである。

この「やばい」に新しい意味が発生した からくりは、次のように理解できる。まず、「心体に不都合が出るくらいすごい物事」という大げさな表現から出発する。この中の不都合という部分を俗語変換すれば、「心体はやばくなるほどすごい物事」、あるいはもつと単純に「やばくなるほどすごい物事」となる。最後に言葉を大胆に省略すれば、「やばい物事」ができる。

どうやら、この新型やばいの使い手たちは、このあたりの事情を理解して、江戸時代から続く「やばなこと」をそのまま現代語に置き換えた旧型やばいとの論理的整合性には特段の 問題はないと判断している確信が強い。

しかし、最後に得られた形だけを見ると、これが省略を 施した結果得られた新型やばいなのか、それとも古典的やばいなのかは判別できない。結局、やばいが肯定的に使われているのか、それとも否定的に使われているのか判断するには、前後の文脈から推論するしかないのだ。

ほとんど正反対の意味が共存し得るという、言葉としては チメイ的な欠陥を有しているにもかかわらず、「やばい」の新しい用法が若者たちの日常会話を飛び出して、辞書に載るほどまでに定着したのは、なぜだろうか。

その理由を考え始めると、この現象は「ありがとう」の変遷にも似ていることに気づく。「ありがとう」の語源をたどれば、これは「有り難し」に行き着く。これは、有ることが難しい、すなわちめつたにないという意味である。もとはと言えば、「ありがたき幸せを喜ぶ」「ありがたき御配慮に恐れ入る」などのように、めつたにないほど素晴らしい幸せを喜ぶ、めつたにない特別のご配慮に感謝するという文章形式で使われていたはずのものである。ところが、江戸時代になると、めつたにない物が何であるのか記述するのを省略して、4「ありがたし」だけで感謝の気持ちを表すようになり、現代語の「ありがとう」に至るのである。

めつたに起こらないことには、良いことも悪いこともあるはずだ。よつて、論理を純粹に追求するならば、「ありがとう」だけ単独で使用された場合には、肯定的な意味も否定的な解釈もあり得る。もし「ありがとう」が定着する前の時代に現代人たちが紛れ込んだとしたら、その人々が「ありがとう」だけで用を足すのに顔をしかめ、それでは良い意味だか悪い意味だかわからないではないかというエッセイを書くような人物が生まれたに違いない。

しかし、現代の日常会話で、「ありがたき幸せを喜んでおります」などと言われると、むしろ大げさすぎてくだいように聞こえるだろう。単に「ありがとうございます」と言われたほうがよほど感謝されているような気分になる場合が多いのではなからうか。つまりここには、当然となる価値判断の部分にかかわる記述を省略したほうが、より気持ち伝わるという感覚が横たわっているのである。

では、5なぜそのような価値判断を表す根幹部分の省略が、人々に好まれるのであろうか。

明らかに、そのような省略が行われても不都合が生じないためには、省略されてしまった価値判断にかかわる前提が、お互いに正しく理解されていなければならない。つまり、省略部分を正しく補い意味に 齟齬を生じさせないためには、多くの経験と価値判断を共有している同

じ集団に属していることが、お互いに認識されていなければならないのである。

また、省略された部分を意識の下で確認しあうという行為が、お互いの間で価値観が共有されていることの理解を深める点も見逃せない。言葉の意味にあまりいまいさがあるときには、理解するために聞き手のほうにはあいまいな部分を頭の中で補う必要が生まれる。そして、その⁷間隙を共通の言葉で埋めるといふ体験を通じて、お互いが利害を共有している仲間であるということをついそう深く感じることができるのである。

言葉の省略とは、お互いが価値観を共有していることを確かめる検査をしているようなものなのだ。やばいに限らず、一般に隠語を共有することに独特な喜びが生まれることにも、同様な説明ができる。それは、省略された前提を知らなければ理解できない隠語を使いこなすことで、共同体感覚や仲間意識の再確認作業をすることができるからである。

言葉を省略することに、そのような効果があるとすれば、言葉の省略をしないということは、かえって相手と自分の間の距離を遠ざける可能性があるということを示唆⁸する。省略をせずにあえて述べるということは、それは意味の補完ができるかどうか疑わしいと考えていることの現れである。すると、当然自分も仲間であると考えていた人は、自分が相手と価値観を共有しているかどうかを疑われているようで、面白くないと感じるのである。

これらを考慮すれば、お互いの間でわかりきっているはずの事柄は、あえてくどく説明せずに省略することが、相手との関係を密にするために有力な戦略になっているといえるだろう。つまり、仲間であることを確認し強調するために、言葉をできるだけ省略しよう、あるいは極端に前提が省略された隠語を使いたいというインセンティブが働くのである。

さて、省略という点では「ありがとう」と共通項があっても、「やばい」の場合には旧型やばいにすでに否定的な意味が付与されてしまっているという現実がある。混乱を避けるため、そのうちに「良いやばい」と「悪いやばい」という使い分けが発生するかもしれないが、そのように面倒などちらつかずの言葉はなおさら使わないほうがよいということになり、それでは「やばい」はいつまでたつても⁹俗語の域を出ないだろう。

新型やばいがその意味をいつそう確固たるものにするためには、旧型やばいの用法が¹⁰クチクされてしまう必要がある。そして、可能性ということであれば、旧来の用法を使いこなす人が減少することで、しだいに「やばい」とは特別な感動を表すほうが主たる意味になっていくこともあり得る。

道行く人々が、「今日は本当にやばいですね」とあいさつを交わすような図はなかなか私には思い浮かばないが、長い歴史の中ではそういうこともあるものなのかもしれない。ただし、それが現実のものになるとしても、私のような旧型やばいの使い手たちが死滅した後の遠い将来のことであろうが。

(梶井厚志の文章による)

〈注〉『膝栗毛』 十返舎一九の作品『東海道中膝栗毛』のこと

インセンティブ 動機づけ

問一 二重傍線部 a、b、c、d の片仮名を漢字に改めよ。

a フキユウ b ト(げ) c チメイ d クチク

問二 二重傍線部 ア、イ、エ の漢字の読みを平仮名で記せ。

ア 陥(る) イ 払拭 ウ 施(した) エ 示唆

問三 空白部 X を埋めるのに最も適当なものを左の中から選び、その番号を答えよ。

1 がまんすれば味わえる 2 あぶないから動いてはいけない 3 びっくりするほどおいしい
4 ほとんど味がわからない 5 たいへんあやしげだ

問四 傍線部 1 「入り組んだ状態」とあるが、その説明として最も適当なものを左の中から選び、その番号を答えよ。

1 聞き手に理解しにくいように、必ずしも一般的ではない語法を使って話し手が意図的に混乱させる
2 新しい用法が生まれたために、肯定的な用法なのか否定的な用法なのかを明確に判断できない
3 従来 of 用法を参照基準にすることによって、肯定の意味と否定の意味が同時に表現されてしまう
4 心情を表す主観的な意味と危機的状況を示す客観的な意味が、異なった文脈で使い分けられている
5 歴史のある高級な文章語と一部で隠語として使われていた低俗な話し言葉が、完全に融合している

問五 傍線部 2 「からくり」とあるが、その内容の説明として最も適当なものを左の中から選び、その番号を答えよ。

1 新しい用法の違和感をなくすためにインターネットでの使用を広める
2 不都合な表現を言いやすい話し言葉の表現に変えて単純化する
3 隠語を意図的に使用することにより表現効果を高めて言葉を省く
4 古い言い方を現代語に改めて複雑な意味の新しい用法を作り出す
5 誇張した表現を上品ではない話し言葉に置きかえて一気に短くする

問六 傍線部3「問題はないと判断している」とあるが、なぜそう判断しているのか。その理由として最も適当なものを左の中から選び、その番号を答えよ。

- 1 省略された言い方をただ聞いただけでは、それが新しい用法なのか古い用法なのかをはっきりとわかりやすいかたちで識別することができないから
- 2 俗語から生まれた新しい用法は一般に広く用いるには問題があつて批判されるべきだとはいえ、人々に使われて規範となる辞書に掲載されたから
- 3 新旧の用法の間には論理的なつながりが認められないことを知りながら、すでに多くの人々が抵抗感なく平気で新しい用法を使っているから
- 4 巧妙に文脈を使い分けながら意味の違いがありありと感じられるような表現を作り出すことに、新しい言葉を使う醍醐味を見出しているから
- 5 肯定的か否定的かという意味の違いにはこだわらずに、程度のはなはだしさを表すという点では新旧の用法に矛盾はないと考えているから

問七 傍線部4「ありがたし」だけで感謝の気持ちを表すようになり、現代語の「ありがとう」に至る」とあるが、筆者はそうした経緯にどのような事情がはたらいていると考えているか。最も適当なものを左の中から選び、その番号を答えよ。

- 1 価値判断の部分を省略したほうが、相手に気持ちが伝わるという感覚が人々の間に存在していた
- 2 正反対の意味が同時に存在していて紛らわしいという感覚を解消する方向に、人々の気分が傾いた
- 3 共同体に属している人々の間では、省略された部分の意味についての教育が配慮されるようになった
- 4 くどく大げさな文章形式の言い回しに異議が唱えられ、省略した言い方が好まれるようになった
- 5 現代の人々には意味が二重になるような用法は紛らわしく、抗議の文章を記す人も徐々に現れてきた

問八 傍線部5「なぜそのような価値判断を表す根幹部分の省略が、人々に好まれるのであろうか」とあるが、「好まれる」理由を十五字以内で記せ。ただし、句読点等も字数に含むものとする。

問九 傍線部6「齟齬」の意味を五字以内で記せ。

問十 傍線部7「間隙を共通の言葉で埋める」とあるが、どのようなことを言おうとしているのか。その説明として最も適当なものを左の中から選び、その番号を答えよ。

- 1 言葉が省略された部分の意味を勝手に想像して恣意的に充填すること
- 2 省略されてあいまいになった意味をより一般的でこなれた言い方に置換すること
- 3 省略によって生じた空白を心の中で相手と同じ言葉を想起して補完すること
- 4 使い方が間違っている言葉を省略して相手との利害関係を一致させること
- 5 意味の省略によって誤解が生じないように言葉を密にして丁寧に表現すること

問十一 傍線部8「俗語の域を出ない」とあるが、その意味として最も適当なものを左の中から選び、その番号を答えよ。

- 1 これまでの用法に限定されて発展性がない
- 2 品格がない言葉だという認識がなくならない
- 3 稚拙で舌足らずの表現にとどまっている
- 4 ごく普通のあいさつ言葉になるほかはない
- 5 話し言葉として存在しても文章語にはならない

【解答】

- 問一 a 普及 b 遂 c 致命 d 駆逐
問二 ア おちい イ ふっしょく ウ ほどこ エ しさ
問三 3
問四 2
問五 5
問六 5
問七 1
問八 (例1) 価値観の共有を確認できるから。(15字)
(例2) 仲間意識を深く感じられるから。(15字)
問九 (例) 食い違い(4字)
問十 3
問十一 2

【解説】

問四 傍線部1の直前の「このように」が指す内容をとらえる。本来「危険なさまや不都合な様子」を表していた「やばい」という言葉に「自身」の心情が強く揺さぶられるほど「いい」という意味が発生したことで、「どのように解釈すべきなのかとてもややこしい」という状態を指している。

問五 傍線部2の直後に「次のように理解できる」とあることに注目する。「大きな表現から出発」して、一部を「俗語変換」し、最後に「大胆に省略」するのである。

問六 「問題はないと判断している」のは、「新型やばいの使い手たち」であり、彼らは「このあたりの事情」を理解しているとある。「このあたりの事情」とは、問五で扱った「からくり」のこと。「新型やばい」とは「旧型やばい」の持つ「不都合という部分」を「俗語変換」して発生したに過ぎず、根本的な意味用法から外れてはいないと考えているのである。

問七 「ありがとう」の例を説明した最後のまとめの一文に、「つまりここには、当然となる価値判断の部分にかかわる記述を省略したほうが、より気持ち伝わりやすい」とある。

問八 省略が行われても意味が伝わるためには「多くの経験と価値判断を共有している同じ集団」に属し、「価値判断にかかわる前提」が正しく理解されている必要がある。また省略された言葉を意識下で確認しあうことで「仲間である」ということを深く感じられると筆者は分析している。言葉を省略することは「価値観を共有していることを確かめる検査」のようなものと述べられていることにも着目。

問十 傍線部7の直前の「その」という指示語に着目し、傍線部7が「省略された部分を意識の下で確認しあう」「言葉の意味にあいまいさがあるときには、理解するために…あいまいな部分を頭の中で補う」の言い換えになっていることをおさえる。

問十一 「この域を出ない」とは「くにすぎない」ということ。本文で「やばい」が「語感が上品になった」という感じはしない。「良識ある大人が公に使うべき表現ではなからう」と批判されていることも踏まえると2が適当。3は「稚拙で舌足らずの表現」が俗語の性質とはびつたり合わない。5は、俗語が「文章語にはならない」とは限らないので誤り。